

# せとる くおーたりー C. E. T. L. Quarterly

教育・学習活動支援センター広報 No.28

発行日 3. July. 2007

## 巻頭言 教育力の充実を目指して

創価大学学長 山本 英夫

2000年5月、教育・学習活動支援センター開設から7年が経過しました。この間の、本センターの積極的な活動によって、本学のFD活動は大きく進展することができました。センター員をはじめとして、関係の皆様のご努力に厚く感謝申し上げます。

さて、本学は今創立50周年を目指して、新たな前進を開始いたしました。このスタートにあたり、教育ビジョンにおいて私は、最重要の課題として、教育力の充実を挙げております。それは、創立者池田大作先生が「教員こそ最大の教育環境」とご指導くださったとおり、どのような組織、設備、プログラムを持ったとしても、我々教員の成長がなければ、教育の目標は果たせないと思うからです。

はるか古代の大学論には、このようにFDは説かれています。即ち、礼記の学記篇に「学びてしかる後に足らざるを知り、教へてしかる後に困（くる）しむを知る。足らざるを知りてしかる後によく自ら反（かえりみ）るなり。困（くる）しむを知りてしかる後によく自ら強（つと）むるなり。ゆえに曰く、教・学あひ長ずるなりと。兌命に曰く、おしふるは学ぶの半ばなりと。」（我々は学んではじめて、自分の知慮が足りない

ことが分かり、教えてみてはじめて、自分の学問が十分でないから、人に教えることの難しさを知って苦しむのである。自分が未熟であることを知って後に、自分を反省することができる。人に教えることが、どんなに難しいことか分かって後に、自ら研鑽に勉めるようになる。そうであるから、こういう言葉がある。教えることも学ぶことも、両方とも知慮は伸びるのである。また書経の兌命にはこうある。教えるということは、その半分は学ぶということの意味している。）と論じています。まことに、至言ではないでしょうか。人間の歴史において、教育がいかに大切なものであり、また困難であるか教えられます。

創立者は、「希望の世紀へ——教育の光り」の中で、「牧口先生はこうも言われた。『人格の高い教師であればあるほど教育力は大である。』若き心は鋭敏である。学問と人格が光る教師であってこそ、学生は心から慕ってついてくる。『教育革命』は『教員革命』からはじまる。これが牧口先生の確信であり、戸田先生の信条だったのである。」とのべられています。この創価教育の創始者である、偉大な師弟の精神を継承して、お二人が構想した「創価教育の学校」を現実の

ものにした創立者の一念を、私たち教職員は、決して忘れてはならないと自覚しています。続く章に、中国の「国学大師」と仰がれる季羨林（きせんりん）博士の言葉をひかれて「学生に『一杯の水』ほどの知識を授けようと思えば、教師はまず『一桶の水』ほどの知識を用意しなければなりません。教師は、けっして『空の桶』をさげて、授業に臨もうと思っはなりません。師弟には共同の偉大な目標があります。学生は弟子でもあり、同志でもあるのです。」「重要な

言葉である。まず自らが学ぶ。行動する。人の見ていないところで努力し、成長していく——それだからこそ、後に続く人たちも、触発を受けて前進していく。これは、教育者に限らず、すべての指導者が銘記すべきことであろう。」と教えて下さいました。正に智者の対話であります。私たちは深き縁あって、創立者のもとで「人間教育の最高学府」に集い会った学問の同志として、大切な学生を励まし続け、お互いの使命を果たしてゆきたいと願っております。

## 本年度第一回の授業見学会と教育サロンを開催

6月22日（金）に五時限目の時間に今年度第一回の教育サロンがCETLアネックスにおいて開催されました。アロイアウ（E. Aloiau）先生（経済学部准教授）にご協力いただき、四時限目の「EAP for Economics」の授業を見学した後、授業の進め方や内容の構成などについて、参観の感想を中心に活発な議論が展開されました。

授業公開や授業見学会の開催は、かつては先進的なFDの試みだと考えられていました。しか

しここ数年では、どの大学でも取り組まれるFDとして定着してきています。

CETLでは今後も授業見学会と教育サロンを組み合わせる試みを行っていきます。授業のねらいの置き方や適切な方法の選択など、授業の質を高めるためには自分の授業実践を振り返ることが必要です。教育サロンが、教員間のインフォーマルな振り返りの場として、授業改善に寄与できればとCETLは考えます。



授業について話し合うアロイアウ先生と参加者

## 経済学部でライティング・プレゼンテーション講習会を開催

経済学部 小林 孝次

経済学部では2007年3月19日、新年度開始に先立ち、学部独自でFD講習会を行った。海外出張で不在であったメンバーを除き学部スタッフ全員が参加し、とても充実した活気のある講習会となった。内容は新年度の基礎演習において共通して導入されるライティング・プレゼンテーション技法を中心にしたものである。

これまで経済学部では全学のFD講習会への参加に加えて、CETLの協力を得て小さな単位でもスタッフ対象にさまざまな講習会を行ってきた。基礎演習開始直前の2003年には外部から講師をお招きし、経営学部とジョイントでLTD講習会を行っている。そして本年は経済学部単独でしかも講師を学部スタッフで賄い講習会を持つこととなった。

わが学部では基礎演習がはじまり本年で4年が経過し、基礎演習を受けた最初の卒業生を今春送り出した。当初は、経済学部でもその内容は試行錯誤の状態にあり、ある程度内容を共通にしてはじめた。その後、回数を重ねるなかで、各担当者によるさまざまな工夫が取り入れられ、内容に多少のばらつきが生じてきた。また4年が経過したこの機会にこれまでの経験を活かしつつ、さらなる発展・充実をさせていこうとの提案があった。こうしてまず、学生・教員両者にアンケートをとりそれにもとづき、基礎演習の内容について再検討がなされた。その結果、再び内容を7～8割程度は共通のものにしていこうとの意思統一が図られた。経済学部ではすでに英語についてはITPテストやインターナショナルプログラムIPを通じてトレーニングが行われており、数学については経済数学入門が提供

されている。よって導入教育の残りの課題としては国語、日本語能力のトレーニングが必要であるとの結論に至った。こうして本年度より新たにライティング、特にレポートの書き方についての講義を基礎演習の内容に共通して取り入れることになったのである。そこでまずは担当教員がしっかり準備をして臨んでいきたいとの趣旨で今回講習会を開催することになったのである。



経済学部のFD講習会

講習会は、アカデミックライティング技法とプレゼンテーションの仕方について、2本立ての内容で行われた。はじめに勘坂純市教授が自ら作成され、授業で用いてこられたアカデミックライティングの教材をもとに、レポートの書き方講習についての具体的解説があった。次に神立孝一教授より、情報を正確に伝えることがいかに難しいかを学ばせる基礎ゼミでの事例研究が紹介された。小ブレイクのあと、経済学部ファカルティメンバーでプレゼンテーション技法を専門の1つとするE.アロイアウ准教授（当時助教授）より、プレゼンテーション手法についてユーモアあふれる講習が行われた。最後に長谷部秀孝学部長からゼミ生が作成したプレゼ

ンテーションについての事例研究が紹介された。

はじめにふれたように今回の講習会では、外部から講師を招くことなく、学部自前のスタッフで行った。結果的にこれが大変効果的であった。それは、講師、参加者ともに気心の知れた仲であり、一方で参加者には4月からの基礎演習において自ら担当しなければならないという緊張感があったからである。こうしたなか自ら

の基礎演習担当経験をもとに、参加者からもさまざまな具体的、建設的な意見が活発に交わされたのである。終了後、今回の講習会における充実した研修内容と経済学部ファカルティの一体感に対して、多数の参加者から大変よかったとの声が寄せられた。経済学部では今後も学部教育のさらなる発展・充実へ向けて、なお一層の研鑽を続けていきたいと思う次第である。

## 新入生勉強法ガイダンスを開催

本年で5回目を迎える新入生勉強法ガイダンスが4月5日午後4時より約1時間にわたって開催されました。大学での勉強のポイントを紹介する同ガイダンスには、今回、300名を超える学生が参加。3教室にまたがり、CETLスタッフの大学院生5名が講習を担当しました。

ガイダンスでは、大学と高校までの授業の違い、ノートのとり方、教科書の使い方、レポートの書き方、予習・復習の意義や方法、試験対策、履修についてなど、多岐にわたってアドバイスがなされ、あわせて各テーマごとに詳しく記したプリントも配布されました。

先輩たちが自らの経験をふまえて述べた話には参考になるところが多かったようです。実際、回収したアンケートによると、9割以上の人が、このガイダンスの内容は「役に立つ」(76%)「少しは役に立つ」(23%)と答え、「今後、CETL主催の企画があれば、また参加したいと思いますか?」との質問に対しても同様に9割以上の人が「是非参加したい」(49%)「どちらかといえば参加したい」(47%)と答えています。

その他、講習会の感想としては、「聞けてすごく良かったです。不安だらけだったので少し安

心できました。家に帰ってからもう一度もらったプリントを読み返して頑張ってみます」「とてもためになりました。CETLにも行って、いろいろ聞いてみたいです」「プリントがとても詳しくて嬉しかったです。この講習があったので授業への心構えができました」「勉強頑張ろうと思いました。これからもよろしくお願いします」等の声が寄せられました。

一方、要望も様々寄せられています。主なものとしては、「工学部学生のための理系講習会を開いてほしい」「法律的文章の作成についてなど法学部生のための講座も開いてほしい」「英語等語学の勉強法を教えてほしい」「留学や資格取得に必要な能力について教えてほしい」等の声が複数見受けられました。ただ、それら要望の中には、英語学習相談室やキャリアセンターなどCETL以外の部署がその機能を受け持っているものもあります。目的に応じて各種の学内サービスを学生に紹介していくとともに、今後は他部署との連携も含めて学習支援をさらに充実させていくことが望ましいといえましょう。

(CETLスタッフ：長田健一)

## 話し合いと授業づくりを通して身につける基礎的な力 総合演習

教育学部 宮崎 猛

「総合演習」は入学直後に行われる導入・入門授業である。そこで、「大学での学習に必要な技能」を修得させるとともに、教育学部の学生を対象としていることから教師として必要な、あるいは教師になるために必要な基礎的な力の育成も視野に入れる必要がある。授業を始めるにあたって、次の3点を育成すべき目標として掲げた。

- ①大学生として必要とされる学習技能
- ②授業をつくったり構成したりする力量
- ③課題を構成員の一員として解決する能力

①については、4年間の大学での学びをより充実させるために必要な学習技能で、「資料の読み方・調べ方」「思考を適切に表現する技能」「レポートや論文の書き方」などが含まれる。②については、本学教育学部の学生が卒業までに身につけなければならない力量であり、授業をつくるためには、「構成力」や「思考力」など多様な力が必要である。授業づくりで身につけた力は、大学での多様な授業での調査・資料収集・発表などにも応用可能である。③については、大学という集団の中で直面するであろう様々な課題を克服していくために必要な力である。

これら3つの育成のために2つの要素(柱)を取り入れることにした。一つは前半部分で取り入れた協同学習(LTD)であり、もう一つが後半部分で行った「総合的な学習の時間」(以下総合的な学習)の授業づくりである。LTD(Learning Through Discussion)では、入念な事前学習・準備が必要とされ、そのもとに構造化

された話し合いが行われることから、「調査の仕方」「議論の仕方」「問題の本質を考える力」等の基礎的な力を育成することが可能になると考えた。総合的な学習の授業づくりでは、「コミュニケーション能力」「企画力」等の様々な力量を体験的に身につけさせることができると考えた。授業は以下のように展開した(囲みは学生のレポート等より)。

第1回 全体オリエンテーション・クラス分け

第2回 クラス開き・自己紹介・本授業の方針

ミラーリング(他者の自己紹介を反復しながら進める技法)を通しての自己紹介

いきなりでびっくりしたが、ミラーリングで授業の雰囲気がとても和んだ。

第3回 図書館オリエンテーション

第4回 LTDの概要説明、ポートフォリオについて

新聞記事の読み取りをもとにLTDの意義と方法を実践的に概説。ポートフォリオの作成について概説。次週までの課題:日経新聞の総合学習に関する記事をLTDの方法に即し予習してくる

話し合いができて楽しかった。単語などの意味を調べたりする時間がなかったので、もう少しじっくり新聞記事を読む時間があればよかった。

第5回 LTDの実践

日経新聞の記事をもとにLTDの方法に基づいて話し合い

予習にはかなりの時間をかけ、骨の折れる作業だと思いました。自分がわからないことを明確にしておくことやしっかり調べておくことで、授業ではとてもよい内容のディスカッションとなりました。

仲間たちとともに学ぶ中で生徒たちに自信を回復させて、最終的にはそれぞれがこれから夢や希望を抱くように導いていた。これは先生の力量によるところが多いと思う。

#### 第6回 総合的な学習の理解

総合的な学習の概要説明とともにその意義・課題などについてグループで討論・検討

総合的な学習の時間の、“総合”、“的な”、“学習”、“時間”、のそれぞれの意味について深められた。

#### 第10回 総合的な学習の授業づくりの基礎

先の西坂小学校の実践の分析を行い、どのようなねらいや構造のもとに授業がつくられているかを分析的に検討

何よりも大切なことは、総合的な学習が終わってからも、子どもたち一人ひとりの生活の中で学んだことがいかに残りいかされているかということだと思う。

#### 第7回 総合的な学習の実践

長崎県西坂小学校の実践を紹介したビデオを視聴し、総合的な学習の実践を理解するとともに、実践の特徴、課題、意義などをLTDの方法を意識した話し合いで深める

色々なやりかたで子どもたちがきちんとやっていたので驚いた。総合は教科との結びつきが大事だと思う。

#### 第11回 総合的な学習の授業づくり (1)

グループごとに総合的な学習の授業構想ならびに指導案を作成

#### 第12回 総合的な学習の授業づくり (2)

同上

#### 第13回 総合的な学習の授業の発表

グループごとに構想した授業案を発表

#### 第8回 LTDの実践を通して「生きる力」の考察 学習指導要領が求める「生きる力」とはいかなるものであるかをグループで検討

私たちは①コミュニケーション力、②想像力→創造力、③信頼関係の3つを取り上げた。それぞれについて深い話し合いができた。

テーマ設定にも時間がかかりましたが、何よりも生きる力を育成するための“しかけ”を考え、それを構造化していくのは本当に大変でした。

#### 第9回 「生きる力」育成の方途

アメリカの高等学校の実践ビデオを視聴して、「生きる力」の実際を再考するとともに、それを育成する方法についてグループで検討

#### 第14回 振り返り

授業案の相互評価、半期の授業のまとめ・振り返り、ポートフォリオの提出

本授業の成果は、学生の評価や記述内容などから、およそ次のようなものと捉えることができる。①ディスカッションの意義を感得させることができた。②スキルや思考方法など他の授

業への援用・活用させることができた③教師としての意識づくりが可能となった。具体的には以下のような記述がみられた。

「いつもディスカッションをやって他の人の意見も聞くことができ、自分の考えを広げることができた。また毎回最後に書くミニレポートも自分達の意見をまとめることができた」「自分が教師の側になって授業をつくっていく、というのは自分にとっても良い刺激になったし、先生たちの苦勞を知ることもできた。自分からつくっていくので、主体性が絶対に必要で、そのことを身をもって経験することは、これからの自分にとってとても大切だと思う。」など

一方課題としては、困難な課題を解決し、乗

り越える力が不十分だったと考えられる。授業評価によれば、「課題をやり遂げる醍醐味を知った」(30.8%)「苦手意識を克服できた」(15.4%)をあげた学生は少数に留まった。これに呼応するように多くの学生は意欲的に取り組んだと自己評価している一方で、予習・復習については、30分程度(42.9%)、何もなかった(21.4%)を合わせると過半数に上る。本学の学生の潜在的な力を引き出すために、予習・復習等の課題を付加させることも可能であったと考えられる。

\*LTDについては本学習センターで度々紹介されていることから、内容の紹介は省略した。

\*本年度(2007年度生)より「基礎演習」(1年次)と「総合演習」(2年次)の2本立てになった。

## 「教育改革ITフォーラム」の報告

教務課 赤石澤 敏和

教育改革に奔走する日本の私立大学が、教育・学習支援や学生の学習意欲向上など、直面する様々な課題にいかに取り組むか。私立大学情報教育協会主催の「教育改革ITフォーラム」が先日開催され、全国127大学、291名の教職員が集い、模範的な教育活動をしている諸大学の事例紹介から、課題解決の方途を模索した。



本学の取り組みを紹介する高木功先生  
本学からは、教育・学習活動支援センター

(CETL) 運営委員の高木教授が、「初年次教育と教育支援」をテーマとした分科会で、CETLを中心とした本学の組織的な教育・学習支援の取り組みを紹介。参加した諸大学の教職員から大きな反響を得た。

私は午前のテーマ別自由討議では、「スタッフ・ディベロップメントへの組織的取り組み」と題する分科会に参加し、職員の意識改革・能力開発を積極的に推進している立命館大学の先進的な事例に学んだ。大学改革を真に実効性あるものとするには、教員の側だけでなく、職員の能力開発が欠かせない。立命館大学では2年前に「大学行政研究・研修センター」を設立し、大学行政への深い見識と高いマネジメント能力、そして政策を企画・立案し、実践する力量を備えた職員の育成に取り組んできた。中でも「大

学幹部職員養成プログラム」では、毎週金曜日の午後から深夜にいたるまで、講義や政策立案演習、論文作成や語学教育など、充実した職員教育を提供している。将来的に「大学アドミニストレーター養成大学院」の設立も構想している立命館の実践には、眼を見張るものがあった。

午後の事例紹介では、名古屋学院大学の岸田賢次教授が「文科系教育におけるFDとIT活用」をテーマに、eラーニングを理解促進用学習支援ツールとして活用した、自身の授業運営について紹介があった。徹底した自己分析をもとに、学生が講義に集中しないのは学生に責任があるのではなく、自分の教室運営手法に改善すべきテーマがあると判断。事前学習や講義内での理解度チェック、理解誘導型の練習問題など、eラ

ーニングを存分に活用した講義シナリオの作成が功を奏し、学生の理解力が大きく向上した。その結果は学生が毎回の講義後に提出するノートを見れば一目瞭然。はじめは板書した内容を2～3行程度書き写したノートを提出していた学生が、学期半ばには授業中に講義内容をまとめ、終了後すぐに図表入りでわかりやすいノートを提出できるまでに変わった。

日本の各大学が様々な工夫をし、教育改革に真剣に取り組んでいる姿は、よい刺激となった。本学も新総合教育棟や新総合体育館など、ますます発展するハード面での建設以上に、教育の質向上と学生の学習支援という、ソフト面の開発・発展に更に尽力してまいりたいとあらためて決意させて頂いた。

## Information

9月14日に協同学習の世界的権威、ロジャー・ジョンソンならびにデービッド・ジョンソン博士が来学されます。大学教育に関しては、数多くある著作の中でActive Learning: Cooperation in the college classroomが『学生参加型の大学授業』（玉川大学出版部）として翻訳されています。会場など詳細は改めてご案内しますが、午後1時から3時の間で、講演会をお願いしています。

今回の来日は、日本教育心理学会と日本協同教育学会の招聘で実現しましたが、その具体化にあたっては、本学が昨年度採択された「大学教育の国際化推進プログラム」（海外先進教育研究実践支援GP）に基づいた教員派遣が大きく貢献しています。また、世界的な協同教育実践研究家が本学で講演するのは3人目ですが、日本国内では他に例を見ません。このように本学がFDの一環として紹介、導入に努めているCooperative LearningあるいはCollaborative Learningは、世界中の授業改善のキーワードになっています。14日はガイダンス日であり、授業開始前ではありますが、多くの先生方のご参加をお待ちしています。

## 編集後記

経済学部FDの報告に「FDの内発性の尊重と自己革新性の堅持」の理念があらわれています。この流れの維持・発展がCETLの大切な課題です。皆様のご協力に心より感謝します。

(U)

C. E. T. L. Quarterly No. 28

編集・発行

創価大学 教育・学習活動支援センター

〒192-8577 八王子市丹木町1-236

Tel : 042 (691) 9782 内線 2146

E-mail : cetl@soka.ac.jp